

令和 6 年 6 月 5 日現在

機関番号：34504

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20082

研究課題名（和文）青森ねぶた祭におけるハネトライダー／チャリダーの民俗学的研究

研究課題名（英文）An Ethnographic Study of Haneto-rider/Chari-der in the Aomori Nebuta Festival

研究代表者

三隅 貴史（MISUMI, Takafumi）

関西学院大学・社会学部・助教

研究者番号：20962971

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通して得られた成果は、以下の4つである。①：青森ねぶた祭における運行団体・ハネトライダー／チャリダー関係に関する成果（なぜ地域外参加者までもが祭礼運営に貢献するのかという論点の解明）、②：祭礼研究の分析視角に関する成果（先行研究を、社会統合論・自己充足論・対抗論と総称可能な分析視角から整理し、提示）、③：小・中規模の神輿渡御の維持に関する成果（小・中規模の神輿渡御がどのように維持されているのかという論点の解明）、④：コロナ禍の祭礼の実施に関する成果（レジリエンス論の視角から、コロナ禍の祭礼を、担い手たちの継承へのこだわりが見られたものとして説明）。

研究成果の学術的意義や社会的意義

筆者が、祭礼研究で見られる理論的分析視角とその対立の歴史を整理したことによって、祭礼研究の論点が明確になった。加えて筆者は、対抗論の視角を発展させる形で、祭礼を闘争理論から分析する視角を新たに提案した。これらの知見は、今後の祭礼研究において、一定程度参照されることだろう。この点が、本研究の最大の学術的意義である。また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大下における祭礼継承の戦術や、東京圏における小・中規模神輿渡御の維持のメカニズムに関する研究は、祭礼を通じた地域的共同性の実現や、より「良い」住民自治の達成の一助になるものといえる。この点が、本研究の社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：The following four results were obtained from this study. (1) This study elucidated the relationship between Haneto-rider/chari-der and the organizers of the Aomori Nebuta Festival, clarifying why even non-local participants contribute to the operations of the festival. (2) The theoretical perspectives of previous studies were sorted from the perspectives of the social integration, self-consummatory, and conflict theories. (3) This study elucidated the organization of small-scale festivals, clarifying how small-scale festivals are maintained. Finally, (4) the management of the festival during the COVID-19 pandemic was analyzed from the perspective of the resilience theory; the results showed their strong commitment to carrying on the festivals' tradition.

研究分野：民俗学

キーワード：民俗学 祭礼 祭り・行事 新型コロナウイルス感染症 COVID-19

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

青森ねぶた祭は、青森県青森市の中心市街地にて8月2日から7日まで実施される祭礼である。日本有数の大規模祭礼であり、今日も活発に行われている。

ねぶたの行列には、ハネトと呼ばれる、簡単な踊りを踊り、行列を盛り上げる人びとが多数参加する。7,000円ほどの衣装を購入するかレンタルし、衣装を着用するだけで、青森市民や運行団体の関係者ではなくても、ハネトとして自由にねぶた祭に参加できる。つまり、ねぶた祭は、多数の地域外参加者が参加している点や、飛び入り参加者による乱痴気騒ぎ的行為の抑制が困難な点などにおいて、日本で最も先端的な祭礼の一つである。

このようなねぶた祭に参加している地域外参加者の集団が、ハネトライダー/チャリダーである。ハネトライダー/チャリダーとは、ねぶた祭の時期に青森市を訪れ、市が整備している「サマーキャンプ場」で共同生活を送りながら、ねぶた祭に参加するバイク・自転車・旅愛好家の集団のことである。かれらは、約7日のあいだサマーキャンプ場で共同生活を送る。多い時で約200人の集団で、約4割が初参加者だが、「常連」と呼ばれる人びとの中には、10年以上毎年参加し続けている人も多い。

ハネトライダー/チャリダーは、ハネトとしてハネることよりも、「バイクパレード」(ねぶた衣装を着用したライダー100人以上が参加する集団走行)や「同窓会」(長年一緒にねぶた祭に参加し続けている友人と歓談すること)を目的としている側面もある。つまり、ハネトライダー/チャリダーにとって、ねぶた祭にハネトとして参加することは、様々な目的のうちの一つにすぎないともいえる。

では、ハネトライダー/チャリダーのような地域外参加者が多数参加するねぶた祭を分析するにあたり、どのような理論的分析視角を用いることが適切なのだろうか。そしてその視角からは、地域外参加者が多数参加する現代の祭礼をどのように説明することができるのだろうか。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「闘争理論 (conflict theory)」の視角から、数多くのアクターが関係する大規模の祭礼の一つであるねぶた祭などを分析することを通して、現代日本の大規模祭礼の特徴を解明することである。

このために、本研究で最も主要な研究対象として取り上げるのは、地域外参加者が先端的に活躍しているねぶた祭におけるハネトライダー/チャリダーと、かれらとは別の目的を有する集団との闘争・協調実践である。

そのほかに、ねぶた祭から得られた知見を相対化することを目的として、以下の二つの研究対象を設定する。一つ目は、東京圏の複数の神輿渡御に参加する地域外参加者である神輿会(年に複数回、祭礼やイベントにおいて神輿を担ぐことを続けている神輿愛好家による集団)と町会(地域住民を中心とした祭礼の運営組織)との関係性である。そして二つ目が、コロナ禍という非常事態における、岐阜県岐阜市のとある祭礼運営組織の実践である。

ここでいう闘争理論とは、異なる価値観を有する集団による闘争から構築される、終わりのないプロセスとして社会を理解する視角のことである。G.ジンメルに始まる社会学の蓄積や、文化を複数の意味づけがぶつかり合う戦場として理解する文化論的転回以後の文化研究の蓄積などが含まれる。

大規模祭礼やねぶた祭に関する先行研究は、豊富に存在する。しかしながら、先行研究は、伝統的な参加者とはいえない地域外参加者に十分に注目してこなかった。これに対して本研究は、闘争理論の視角を用い、ハネトライダー/チャリダーという地域外参加者に注目することで、地域外参加者と祭礼運営組織との微細な葛藤や闘争を描き出し、闘争の結果、何が達成されたのかを理論化して提示する。そしてこの分析から、祭礼という事例に、異なるものの見方を提示することに挑む。

3. 研究の方法

「2. 研究の目的」において、「ねぶた祭におけるハネトライダー/チャリダー」、「東京圏の複数の神輿渡御における神輿会」、「コロナ禍において祭礼運営を実施し続けてきた岐阜県岐阜市のとある祭礼運営組織」の三つを事例として研究を進めることを述べた。

本研究では、エスノグラフィック・フィールドワークを主要な手法とする。つまり、これらの地域外参加者及び、祭礼運営組織の成員に対する聞き取り調査や、実際に一緒に祭礼に参加することを通じた参与観察から、地域住民と地域外参加者との関係性に関する論点を解明する。

4. 研究成果

本研究を通して得られた成果は、以下の四つである。

(1): ねぶた祭における運行団体 - ハネトライダー / チャリダー関係に関する成果

ねぶた祭におけるハネトライダー / チャリダーの研究を行う上で、筆者が最も重要だと考えているのが、ねぶた祭において、地域外参加者の集団であるハネトライダー / チャリダーが、なぜねぶた運行団体による祭礼運営に貢献するのか？ という論点の解明である。

この成果は、現時点で論文の掲載が確定するには至っていない。今後、論文の掲載に向けた作業をさらに進展させたい。

(2): 祭礼研究の分析視角に関する成果

祭り・祭礼に関する研究は、多様な学問領域にまたがって展開されている。そういった背景もあり、理論的分析視角(ある現象に対して、この理論に基づくとこう説明できるという、理論と現象の説明の組み合わせ)が明確にされておらず、その成果が拡散する傾向があったことは否めないだろう。筆者は、学説史の検討から、祭礼研究の歴史的展開と、そこで提示されてきた分析視角を、以下の三種類に整理し、提示した。

第一の分析視角は、社会統合論である。これは、神を通した社会統合の行為として祭礼を分析した研究群の総称である。祭礼研究における、最も古い分析視角といってよい。E.デュルケームの儀礼研究を理論的基盤としている。

第二の分析視角は、自己充足論である。これは、神が忘れられた個々人の楽しみのための行為として祭礼を分析した研究群の総称である。1980年代半ばに社会統合論批判の文脈で登場した。世俗化論や社会解体論を理論的基盤としている。

第三の分析視角は、対抗論である。これは、複数のアクター間での対抗の上で成立する行為として祭礼を分析した研究群の総称である。1990年代に社会統合論批判の文脈で登場した。H.ルフェールやM.バフチンの研究を理論的基盤としている。

このように祭礼研究を整理したことにより、祭礼研究の主要な論点が、社会統合と対抗に関する理論、世俗化と社会解体に関する議論、社会の秩序と祭礼の伝統的秩序とのせめぎ合いに関する議論の三つに整理できることを明らかにした。この成果は、助成期間中に刊行された単著(三隅 2023)にて公開した。

(3): 東京圏の小・中規模の神輿渡御の維持に関する成果

東京圏では、今日も小・中規模の神輿渡御が維持されている。では、このような神輿渡御は、歴史的に見てどのように誕生し、そして現在、どのように維持されているのだろうか。この問いに基づき、資料分析や参与観察・聞き取り調査を実施した結果、得られた成果は以下の二つである。

神輿渡御の誕生を明らかにするためにに行った、千葉県市川市行徳における神輿製造の歴史研究の成果は次のとおりである。神輿の所在地・製造年・製造者が記録されている書籍を二次的に活用し、分析したところ、行徳産神輿の製造数は、1930年から1934年と1950年から1959年に顕著な増加傾向が見られることがわかった。ここからは、1930年代以降、神輿渡御が活発に行われるようになった地域が多いこと、また、第二次世界大戦によって焼失した神輿が1950年代に再製造され、神輿渡御が復活していることが明らかになった。

現代の小・中規模の神輿渡御を維持させている要因である、神輿会のネットワークに関する研究の成果は次のとおりである。筆者は、資源動員論の視角から、現在の小・中規模の神輿渡御を「人手を必要とする作業」として理解し、完遂するための資源(主に人的資源)の確保を分析した。その結果、これらの小・中規模祭礼においては、睦会型神輿会ネットワークによって担ぎ手が供給されており、それによって維持が達成されていること、そして、睦会型神輿会ネットワークが、「江戸前」担ぎによる賑やかな渡御の維持、地域外参加者が従順になる環境、運営/表現の標準化という三つの帰結をもたらしていることが明らかになった。

この成果のうち、千葉県市川市行徳における神輿製造の研究については、田中祥一を筆頭著者とする論文にて発表した(田中ほか 2023)。その上で、睦会型神輿会のネットワークに注目した研究成果は、日本民俗学会の第75回年会にて口頭発表したものの、論文化するには至っていない。今後、さらなるフィールドワークを実施し、この論点により明快な知見を与えたい。

(4): コロナ禍の祭礼の実施に関する成果

2019年12月に発生し、全世界に拡大した新型コロナウイルス感染症は、人の密集や密着が不可欠である日本中の祭り・祭礼の開催を困難にした。このような背景を受けて、さまざまな学術領域において、コロナ禍の日本の祭礼に関する研究が大量に発表されたものの、コロナ禍の祭礼に対する明快な分析視角の提示や、学説史の整理などは十分に行われておらず、管見では、このテーマに関する査読付き論文が発表されていない状態にあった。

そこで筆者は、2020年にも祭礼を実施し続けていた岐阜県岐阜市のとある祭礼運営組織を事例として、コロナ禍における祭礼の実施に関する研究を行い、その成果を、査読付き学術雑誌『日本民俗学』にて発表した(三隅 2024)。

本論文は、コロナ禍の祭礼において、なぜ担い手たちが疫病退散を強調したのかという問いを立てて、この問いに答えることを目的とした。先行するコロナ禍の日本の祭り・祭礼に関する研究には、脆弱性論(新型コロナウイルスの影響が地域社会と祭礼の脆弱性によって増幅された結

果、行事が実施できず、神事のみが実施されたと分析する研究群)と、原点回帰論(危機の中で本義や原点に回帰したものと分析する研究群)がある。これに対して本論文は、中止・神事の実施と称された祭り・祭礼における「微細な実践」に注目した先行研究や、レジリエンス論を踏まえ、分析を行った。そして、前述の問いに対して、担い手たちによる疫病退散の強調は、新型コロナウイルスの影響を緩和し、祭礼運営を成功させるための「お守り」であり、担い手たちの祭礼継承へのこだわりが表れていると説明した。

助成期間内に公表した論文・書籍

田中祥一・三隅貴史・小口広太, 2023, 「神輿製造・供給先の時空間分析: 千葉県市川市行徳の神輿製造業者を事例として」『千葉商大論叢』60(3):85-105.

三隅貴史, 2023, 『神輿と闘争の民俗学: 浅草・三社祭のエスノグラフィー』七月社.

三隅貴史, 2024, 「コロナ禍の祭礼において、なぜ担い手たちは疫病退散を強調したのか: 岐阜県A神社の春祭り・秋祭りを事例として」『日本民俗学』(317):1-32.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 田中 祥一, 三隅 貴史, 小口 広太	4. 巻 60(3)
2. 論文標題 神輿製造・供給先の時空間分析：千葉県市川市行徳の神輿製造業者を事例として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 千葉商大論叢	6. 最初と最後の頁 85-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 三隅 貴史	4. 巻 (317)
2. 論文標題 コロナ禍の祭礼において、なぜ担い手たちは疫病退散を強調したのか 岐阜県A神社の春祭り・秋祭りを事例として	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本民俗学	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 三隅 貴史
2. 発表標題 小・中規模の神輿渡御の維持と相互動員ネットワーク 東京圏の睦会型神輿会を事例として
3. 学会等名 日本民俗学会 第75回年会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 MISUMI Takafumi
2. 発表標題 Why Were "Ward off the Plague" Emphasized in Japanese Traditional Festivals during the COVID-19 Pandemic?: A Case Study of the Festivals in Gifu Prefecture, Japan
3. 学会等名 2023 Annual Meeting of the American Folklore Society (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 三隅 貴史
2. 発表標題 自著を語る『神輿と闘争の民俗学 浅草・三社祭のエスノグラフィー』
3. 学会等名 第75回関西社会学会大会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 三隅 貴史	4. 発行年 2023年
2. 出版社 七月社	5. 総ページ数 416
3. 書名 神輿と闘争の民俗学：浅草・三社祭のエスノグラフィー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

三隅貴史 - researchmap https://researchmap.jp/takafumi_misumi/

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関